

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 1章 18～25 節

○前回の聖書箇所(1：10～17)で当時のコリント教会の中にあった不和について触れたパウロ。その彼は17節で、「福音を告げ知らせるため」、「しかも、キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるため」に使徒となったと言う。彼の最大の関心はキリストの十字架が現実的な力として明確に提示され、人々の中に救いの実を結ぶことにあり、このような使命観に立つパウロにとって、コリント教会のある人々がキリストの十字架を誤解したり軽視したりして、教会の中に仲間割れや争いを生じさせるのを決して見逃すことはできなかった。教会の一致を真に願うパウロは、今回の聖書箇所から十字架の言葉と知恵について説き明かしをしていく。なぜなら、十字架の言葉と知恵についての誤解から生じる驕りや高慢がコリント教会の仲間割れや争いの原因となっていることをパウロは見抜いていたからである。

【注解】

○18 節：「十字架の言葉」＝イエス・キリストの十字架の出来事、その福音を告げ知らせる宣教の言葉

- ・「十字架」は当時のローマ帝国内のむしろ多数を占めていた奴隷の反乱を力づくで押さえ込むために考案された、磔上で長時間にわたって苦しみつつ衰弱死していく見せしめの刑具。シリア・パレスチナ州で反乱奴隷の磔刑が行われたという記録は少なくないだけでなく、特にユダヤ人にとっては「木にかけられた者は呪われる」と解されており、そんな十字架死を遂げたイエスがメシアであるという福音宣教の言葉は躓き以外の何物でもなかった。(当時のユダヤ人たちは、自分たちを率い、他国の支配を打ち倒して、かつてのイスラエル王国のような王国を再び打ち建ててくれる、そして自分たちに繁栄を享受させてくれる、そんな栄光のメシア、華々しいヒーローとしてのメシアを求めていた。)
- ・またギリシア人を初め異邦人にとっては、哲学的思弁や弁証による説得性のみが受け入れる可能性を与えるという考え方に照らして、歴史上の出来事、まして奴隷の刑死に過ぎない十字架につけられた人物がメシアであるということに真理性を見出すことはできず、それは馬鹿馬鹿しいことであった。

cf. 23 節：「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなもの」

- ・このようなことで、「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなもの」だとパウロは言う。しかし、「わたしたち救われる者には神の力」に他ならないとパウロは宣言する。

○「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする。」(19 節)
→イザヤ書 29：14 からの引用。

パウロはこの御言葉を引用することで、十字架の宣教がこの世の知恵を無効にするという神様の働きであることを明らかにする。

- ・この世は愚かであって自分たちだけが真の知恵と知識の所有者であると誇ったのがパウロ

ロの論敵たちだった。しかしパウロは、この世の知恵に取って代わる神様の知恵が、人々には愚かと映る十字架の宣教として現されたことを強調する。十字架の宣教は人々には愚かと映るものだが、しかしこれが実は神様の知恵であり、この神様の知恵がこの世の知恵を無効化し、これに取って代わる、そしてこれを受け入れる人々を救いに導くとパウロは言うのである。パウロにとって、自分たちが為している十字架の宣教は神様のこのお働きに他ならない。

○20 節：「知恵のある人」＝ギリシア世界の哲学者

「学者」＝ユダヤ人の指導者、律法学者

「この世の論客」＝ヘレニズム世界の道学者、教育者として人の道を教える人々

- ・これらの人々のいかなる人間の知恵も含めて、神様によって「世の知恵」がいかに愚かなものかが実証されたとパウロは言う。
- ・それは世が「自分の知恵で神を知ることができ」なかったからに他ならない。しかし、それもまた神様の知恵であって、「神は、宣教という愚かな(＝人には愚かと思える)手段によって信じる者を救おうと、お考えになった」。私たちが救われるのは、この宣教を通してイエス・キリストの十字架を信じる以外に全く可能性がないとパウロは強調する。
- ・イエス・キリストの十字架によって唯一の救いの道が開かれているというこの福音は、この世の知恵者にとって「愚かな」、すなわち価値のないものと思われるだろう。しかし、この十字架の福音こそ、実は「隠されていた、神秘としての神の知恵」(2:7)に他ならない。人は自らの知恵を通してではなく、「神の知恵」を信じる信仰を通して救いに与るのである。

○22 節：「ユダヤ人はしるしを求め」の「しるし」は「自然の一般的法則に反する不思議、奇跡による証拠」のこと。ここでは特に、当時のユダヤ人が抱いていたローマ帝国からの解放者としてのメシア観に合う奇跡による証拠を指していると思われる。

- ・「ギリシア人は知恵を探しますが」の「知恵」は、「愛知」(⊕フィロソフィア)としてのギリシア哲学のこと。
- ・こうしたユダヤ人とギリシア人の求めを確かに知りながら、しかしパウロは同労者と共に「十字架につけられたキリスト」を中心内容とする福音を「言葉の知恵によらないで」宣べ伝える。
- ・それは既に述べたように「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなもの」だが、キリストのみに希望を置く「召された者」にはその人を救いへと導く「神の力、神の知恵」となる。そこではユダヤ人とギリシア人(異邦人)の差別はまったく乗り越えられる。イエス・キリストの福音は民族や国家の差別ばかりでなく、あらゆる差別を越える神の力に他ならない。

○そしてパウロは、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」(25 節)と結論付ける。イエス・キリストの十字架の事実はたとえ人の目に「神の愚かさ」や「神の弱さ」と見えたとしても、それは信じるすべての人に救いを与える知恵であり、力なのである。

【今回の聖書箇所から思うこと】

○今回の聖書箇所を読んで、18節の御言葉が最も印象に残った。

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」

→ここで言われている「十字架の言葉」というのは、既に述べたようにイエス・キリストが十字架で死なれた、その事実と意味を告げ知らせる教会の福音の言葉を指している。パウロによれば、この福音の言葉は、滅びに向かって現に進み続けている人々と救いに向かって現に進み続けている人々によって、異なる受け取り方をされると言う。前者は福音の言葉を「愚かなもの」と見なし、後者はそれを「神の力」と見なすと言う。

・では、なぜ滅んでいく者は、イエス・キリストの十字架を告げ知らせる福音の言葉を「愚かなもの」と見なすか？

→それは、彼らがこの世の知恵、罪を持った人間の知恵にすっかり毒されているからだと思う。彼らは弱肉強食こそこの世界の真理であり、そんな中で自分が上になり、他の人々を支配するようになることこそ救いだと思じている。そんな彼らからしたら、ローマ帝国の残酷な処刑方法で見せしめのように殺されたイエス様、この世の中で最も力のない姿となられたイエス様こそ救い主であるという論理は、馬鹿馬鹿しくて受け入れられないのだろう。もしも神様が、当時のユダヤ人たちが待ち望んでいたように、かつてのダビデ王のような華々しいヒーローのようなメシアをお遣わしになって、付き従う人々を皆支配者の位につけ、この世的な繁栄に与らせていたならば、教会の福音がそんなメシアの到来を告知するものであったならば、彼らは喜んでキリスト者となったことと思われる。けれども、実際は、神様はすべての人々の罪を背負って十字架の上に死に、私たちの罪の贖い、救いを成し遂げるメシアとしてイエス様をお遣わしになった。そんな風に、メシアが私たちの上に立つどころか、私たちのさらに下、まさにどん底の極みにまで下って行って救いを成し遂げられたなどというロジックは、彼らにとっては信じるに値しない、まさに「愚かなもの」以外の何物でもないのである。

・しかし、このロジックを受け入れることのできる人々にとっては、十字架の福音はまさに「神の力」に他ならない。なぜならそれは、愛の力でこの世界を変えていく可能性を大いに秘めているからである。イエス様が十字架というまさにどん底にまで下って、そのように御自分を犠牲にしてまで私たちの救いを成し遂げてくださった。この福音の事実は、これを受け入れる人々にある変革を促す。弱肉強食の価値観を離れて、自分も人の下に立って仕え合う、そして傷むほど愛し合う道を歩んで行くように人々を変えていく。そして、この愛によってこの世界を実際に変えていくのである。この意味で、イエス・キリストの十字架の福音は、自分の幸せだけを願い、互いに蹴落とし合う世界から、まことにすべての人々の幸せを願い、共に生きる世界へとこの世界を変えていく大きな力を秘めている。

○しかし、こんなことを言うと、ある人はこう言うかもしれない。「そんなのは愚かな机上の空論だ」と。「実際、私たちが生きているこの世界の歴史を振り返ってみても、イエス・キリストが十字架で死んでその愛をお示しになったにもかかわらず、それ以後の2000年

間はちつとも人々が共に生きる世界になっていないじゃないか。相変わらずこの世界は、自分の幸せだけを願い、互いに蹴落とし合う人々で満ちている。イエス・キリストの十字架など、罪が溢れるこの世界では何の力も発揮しないのだ。弱肉強食こそ、この世界の真理なのだ。そんな中で私たちが救われる方法はただ一つ、強い力を獲得するのみだ」と。

- ・この世の知恵で考えれば、そういう結論になるのかもしれない。けれども、このようにこの世の知恵でのみ思考し、イエス・キリストの十字架の福音を愚かなものと見なす人々に対して、パウロは「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」と呼びかける。この世の知恵からすれば愚かに思える十字架の福音に、なお自らの救いを依り頼むよう訴えるのである。
- ・この世の知恵からすれば愚かに思える教会の福音が、実は私たちに救う唯一の道であり、力であり、知恵である。だから自分は他の誰に批判されようとも愚直に十字架の福音を宣べ伝えていく。これが、今回の聖書箇所に入れたパウロの思いだろう。

○今回の聖書箇所を読んで、私もこの現代の社会の中でパウロのようになりたいと強く思わされた。ここで今の私たちの社会を振り返ってみれば、そこでは政治家というこの世の知恵者が力による救いを強固に主張している。「この世界は弱肉強食だ。力を持たなければ他国にいいようにされてしまう。力を持つことこそ自国を平和にし、救う唯一の手段なのだ」。そのように主張して、アメリカから大量に武器を買い、日米軍一体化を推し進め、アメリカと共に戦争のできる国を目指そうとしている。

- ・しかし、武装や戦争によっては決して平和は成し遂げられない。平和はすべての国、すべての人々が武装を解き、戦争を放棄した先にこそ成し遂げられるものである。だから、私たち教会はこの社会のただ中であって、「力を捨てよ、知れ わたしは神」と仰られた神様のその御言葉を一生懸命宣べ伝えていく。神様の御前にすべての国、すべての人々が「力こそ正義」、「力こそ救い」の弱肉強食の世界を離れてあらゆる武装を解き、あらゆる戦争を放棄することを強く訴えていく。それこそ、皆が力を求める中であえて無力な姿となられた、そうして人の下に立って仕える犠牲愛で救いを成し遂げられた十字架のイエス・キリストに従うあり方だろう。
- ・私たち教会のこうした主張、こうしたあり方というのは、この世の知恵者からすれば「愚かなもの」と映るのかもしれない。政治家たちは私たちを見て、きっとこう言うだろう。「そんなのは単なる理想主義だ。実現しないイデオロギーだ。あなたたちはこの国の防衛のことがまるで分かっていない。大馬鹿者だ」と。けれども、たとえそのように批判されようとも、私たちはイエス・キリストの十字架の福音に依って立つ自らの主張を変えることはない。「神の愚かさは人よりも賢い」。軍拡に救いを求めることが、所詮は滅んでいく者の知恵に過ぎないこと、完全な武装放棄、戦争放棄に至る軍縮にこそ救いがあることを愚直に訴えていく。
- ・この世の知恵からすれば愚かに思える教会の主張、教会の福音こそ、実は私たちに救う唯一の道であり、力であり、知恵である。この確信のもと、誰に批判されようともパウロのごとく愚直に十字架の福音を宣べ伝えていきたいと願う。